



は、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる(15:19)と申しております。

「もし」が現実のこととすれば、使徒信条の告白は音を発して崩れます、それだけではありません、礼拝で語る説教者の言葉は「むなしくおっしゃる」(15:19)「マーマンはいエスにおいて実現した」(20)「19(1)などということは、二度と口にする事ができません。パウロの」も「には、それほどの思いがこめられています。

わたしたちが万難を排して、日曜日の朝、礼拝出席につとめるのも、閑があるから、時間を持て余しているから礼拝に励んできたわけではありません。いえ、むしろ、さまざまな時間のやりくりをして、礼拝出席に励んできたのには、深い仔細がありました。

「もし、わたしたちが、この世の生活で、キリストにあって、単なる望みをいただいているだけだとすれば」とパウロは申しておりますが、わたしたちもまた、今日まで、パウロのいう「もし」にすべてをかけてきたのではないのでしょうか。

今朝、ヨハネ20章を拝読しました。福音書を終わりから読む人はいませぬ。おそろくは始めから読みはじめます。

「ヨハネ」福音書「書」ですが、マタイ・マルコ・ルカの三福音書が成立したのはAD70か80年頃、ヨハネ福音書はAD95年頃と言われています。すると、主イエスが亡くなった後から、40年も50年も経って福音書

が成立したことを不思議と思われませんか。

考えても見てください、主イエスが十字架に架かる以前、弟子たちが「とまと」と「・」つまり「主を否み」、「タの裏切りをも含めて」、こうしたすべての闇の部分に手心を加えず、ありのまま、つまびらかに記録にとびめることなど、福音書記者にできたでしょうか、できうるはずもありません。それができたのは、キリストがよみがえられたという事実が、弟子たちの間で確認されたからではないのでしょうか。

今朝は、最初の復活の証言者となった「マグダラのマリヤ」に目をとめたいと思います。福音書には、実に多くの女性たちの名が記されています。それも重要な場面で多くの女性たちが登場します。

なかでも、十字架の下に、最後まで逃げも隠れもしないで、ただずんでいた数人の女性たちがおりました。弟子たちはいえ、家の中に閉じこもり、戸を閉めていた(ヨハネ20:19)というのであります。

主イエスの死体が墓に納められた時、「マグダラのマリヤ」と「マリアの母マリヤ」と「サロメ」たち女性は、周囲の目をも恐れず、イエスの身体に香油を塗るため墓に向かったのであります。(21:1-2)。

そして、今朝、共に目にしていきますヨハネ福音書20章において、甦られたキリストと最初に出会ったのは、何と、罪み深い女ともいわれてきた「マグダラのマリヤ」であらうか。

た。キリスト教が一人の罪深い女性の証言から始まったというところを、こだわることなく書き記しております。何事においても、男性中心のユダヤ社会であるとすれば、これは異例のことではないでしょうか。女性の証言は、子どもや精神障害者のそれと同じに見なされ、無効とされました。……とすれば、当時の常識とか社会通念に反して、キリストの甦りと最初に会ったのが女性であり、しかも最初の証言者であったことを、無視せず、受け入れ、尊重し、記録にとどめたのには、福音書の隠された真実がありました。

何故なら、みんなが周知していた事実とすれば、曲げて記述することなどできません。正直に、ありのまま、最初のキリスト復活の証言者が女性であったと記録に残したのであります。

(w) ムハネの〇章一節は、「から始まりまず、朝早くまだ暗いうちに墓に來た。そして墓から石が取りのけてあるのを見た。」

マリアが墓のそばを見たものは、残されていたイエスの死体を包んでいた布や亜麻布だけでした。それを見た、ママタラマママコヤがキリストの女みがえりのすべてを信じられたというのではありません。彼女はただ、墓のそばで泣き続けただけであって、

「泣き、捜して見ると、主が二度も二度も押され

ています。(13・15)

「……」もかわらず、15節を見ます、彼女は「墓の管理人」と見誤っています。無理もありません、イエスのなきがらを包んでいた布や亜麻布を見ただけで、それと、すべに分かるものではありません。泣くばかりのマリアですから、声をかけられても、それが誰であるかに気がきません。それで、主は、「マリアよ」と、前から「ではな、後から声をかけられたのです。」

その声には聞き覚えがあるマリアは、振り向き、ラボニ(アラム語でわたしの先生の意)と返答しました。いしまでも気づかずにいるマリア、そのマリアに、イエス自身であることを気づかせようとして、「女」「ではな」「マリアマリア」とその名の呼びかけがあります。

「主」と「わたしは」とは、この女は関係であるとするれば、少なくとも、わたしたちの側から、女みがえりの主を分かるということ、分かるものではなと言いつつになら

り、主、分かるはずでは、それはただ、「向こうから——、即ち、女みがえられたお方のほうから、わたしたちに近づいて、わたちに現わわったのだら、わたしの目を親しくひかけてくださった時、はじめて、それが甦りわたしたちを信じていたが、わたしたちのそばで泣き続けた。」

「マリア」と呼び止められた瞬間、ハッ

振り向き、思わず」ラボニ「とこたえた」マ  
シヤ「で」。

弟子のトマスの時もさうではなかったでし  
うか。「あなたの手を」にひいて、わたしの  
手を見なさい。手をのびしてわたしの脇に差  
し入れなさい」と促された時、思わず彼の口  
をついて出たのは、わが主。わが神。マ  
シヤ「で」。

ペテロの場合もさうです。「ヨハネの子シモン  
は」と三度も名を呼ばれて、そのお方が主  
イエスであることに気づいておられます。  
「パウロ」も同じでした。「パウロ。パウロ、  
なぜわたしを迫害するのか。棘ある鞭を蹴れ  
ば傷を負うだけである」(使徒26:14)と  
その名が呼ばれて、「パウロ」から、「パウロ」  
に改悛したのであります。

・・・では、わたしたちの場合はどうなの  
でしよう、みずからでは、どうにも、こ  
うにも、理解できず、信じることをえもできな  
い不信のままであったわたしに、キリストの  
復活という事実を分からせたくだされたのは、  
他でもありません、聖霊の証明があらまし  
た。主イエスは弟子たちに申されました。

「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあ  
らゆる真理に導いてくれる。わたしは  
自分から語るのではなく、その聞かせる  
語、きたるべき事をあなたがたに知らせる  
ので」(ヨハネ12:13)

受け、聖霊がわたしの心に入ると、わたしは

は救われたのである。この聖霊は、わたした  
ちの救主イエス・キリストをおいて、わた  
したちの上に豊かに注がれた。これは、わた  
したちが、キリストの恵み「あまの御心」を  
永遠のいのちを望むことにより、御国を  
く者となるためである」とあるのです、感謝  
の他ありません。

親しい「マシヤ」と声をかけられて、あま  
りのうれしさに、「主にすがりつこうとした彼  
女は制せられます。」わたしにさわってはいけ  
ない「と」(17節)。

マリヤは、生前をなつかしむだけであって  
なりません、今や、あなたとわたしとは、「先  
生・教師」「ラボニ」との関係ではないので  
す。

わたしは、確かに「十字架にほらられた小羊」  
となりましたが、今は違います、御座にお  
いて、ほまれと、栄光と、さかひとを受け  
るものへと変貌した、わたしはよみがえりの主  
であることに気づきなさいと諭したのです。

マリヤの記憶には、ユダの裏切や、ペテロが  
主イエスを三度否定したこと、イエスがつば  
きをされ、鞭で打たれた、ののしられ、いばり  
の冠をぶせられ、十字架に架けられ、十字架  
の上で、「わが神、わが神」と叫びなが  
ら悶絶して死に絶えた惨めな姿のイエスをま  
じかありません。

それでは、マシヤは悲しみに涙して、墓の前  
に立ちつづけていた時、彼女の背後から、マ  
シヤ「わ」と呼び止めたお方がイエスをみま

ると分かった時、はじめて、あの惨めな十字架に架かられたのは、「キリストがすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである」ことに気づきました。

陰府と悪魔と死の力とに完全に勝利されたキリストとお目にかかれた時、はじめて、ただおいたわしいと思っていたイエスの十字架をあらためて平安な心で見つめ直したに違いありません。

おそらく、マリヤだけでなく、キリストのよみがえりの御光に照らし出されている十字架を見つめない限り、凄惨な十字架だけを見つめることが出来るはずありません。十字架だけを見つめて、わが罪のために主は十字架にかかって下さったと誰が告白出来るのでしょうか。

初代教会の弟子たちは、よみがえられた主、栄光の主を仰ぎ見て、はじめて十字架が「わが罪のため」と見つめ直したのではなかったのでしょうか。

ハイデルベルグ信仰問答書の問45に、「キリストの復活は、われわれに、このよきな益をもたらすのですか」とありますが、その答えは、「主の復活によって、死に勝ち、自分の死によって、われわれのために得られたばかりだ、『義』が、あきらめさせてくれるべきです」

キリストの復活によって、獲得していただく

た「義」とは、それによって神とわたしとの関係が正常になった事とされています。

ロマ書4章24節から25節には、「主イエスは、わたしたちの『罪のために死にわたされ』『わたしたちが』義と認められるために』『よみがえられた』とあります。イエスのよみがえりを信じて、十字架を仰ぎ見た時に救われたのではないのでしょうか。

ですから使徒パウロは勝利宣言をしております。「わたしたちは、これらすべてのことにおいて、勝ち得て余りある。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」(ロマ8:37-39)。

どうか悪性コロナの蔓延で気もそぞろになることなく、今がどうであれ、復活の栄光の主を望みみて、今週も雄々しく歩みたいと思えます。

【共に祈ります】